

《公開講座》

# ジェンダー／セクシュアリティをめぐる 今日的課題

土 野 瑞 穂

## はじめに

今年度の公開講座は、「ジェンダー／セクシュアリティをめぐる今日的課題」をテーマに、2回にわたって対面で開催した。本稿はその開催報告である。報告に入る前に、まずはこのテーマを取り上げた理由として、次のような背景について触れておきたい。

新型コロナウイルスの流行は、日本社会において様々なジェンダー／セクシュアリティをめぐる問題を露呈させた。例えば、家庭内での性別役割分業が未だ根強く残っているため、夫婦共働き世帯であっても妻が休校中の子どもを含む家族のケアに時間を費やさざるを得ない状況が生じた（厚生労働省2021）。また自粛生活中、若年層から望まない妊娠等の性被害相談が増えたとの報道もなされた<sup>1)</sup>。さらにセクシュアル・マイノリティが抱える不安や困難も明らかにされてきた。例えば在宅期間が長期化することで生じるカミングアウトしていない当事者と同居者との衝突への不安である。また、非正規雇用率が高く、かつ就職・転職活動時にハラスメントを受けるリスクを抱えるLGBTQの若者の就労不安もある。さらに、ホルモン投与や性別違和に関連する通院においてコロナに感染した場合に不本意なカミングアウトやアウティングが生じるのではないかといった懸念などである（認定NPO法人 ReBit 2020）。

これらの問題は、コロナ禍以前から存在してきたジェンダー規範がもたらしたものである。災害をはじめとする社会的危機の際にはジェンダー規範が強化されることが指摘されてきた（Neumayer & Plümper 2007）。その一方で、そうした危機はジェンダー規範を揺るがす契機にもなりうる。今回の新型コロナウイルスの流行は、一部の地域だけでなく全国・全世界的な危機である。このことは、誰がどのようなかたちで社会や家庭を維持しているのか、日々の安全は守られているか、私たちはどのようなかたちで誰とつながり、生を支え合っているのかについて、私たちに再考を促しているといえよう。そこで2022年度公開講座では、この危機を社会変革の契機ととらえ、すべての人が生きやすい社会をつくるためには何が必要かについて、ジェンダー／セクシュアリティの視点から参加者と共に考えることとした。各回の講師として、一般社団法人「ちゃぶ台返し女子アクション」<sup>2)</sup>メンバーの中村果南子氏と、一般社団法人 fair の松岡宗嗣氏をお招きした。以下では、それぞれの回の内容を報告する。

## 1. 第1回「性的同意ワークショップ」

(開催日時：2022年10月17日、3限。)

講師：一般社団法人「ちゃぶ台返し女子アクション」中村果南子氏)

公開講座第1回目の「性的ワークショップ」では、中村果南子氏のファシリテートにより、望まない妊娠や性行為、性暴力を防ぐためにはどうすればよいかを学ぶためのワークショップを行った。参加者は3名のみであったが、それゆえに深い議論を行うことができた。以下、ワークショップの内容を、順を追って内容を振り返りたい。

### (1) ワークショップを始める前のグラウンドルールの確認

まずはワークショップを始める前にグラウンドルールを確認した。例えば「話したくないことは話さない」「気分が悪くなったら、自分のペースで休もう」といったものである。後の参加者の感想として、こうしたグラウンドルールの存在が「嬉しかった」との回答があった。性に関するテーマを話し合う際には、参加者の全員にとって安全な場を創り上げるためのグラウンドルールの確認は必要不可欠である。

### (2) アイスブレイク：「ピザの注文を考える」

次に、アイスブレイクとして、「ピザの注文を考える」というペアワークを行った。二人でどのようなピザを注文するかを考えるこの作業は、私たちが何か物事を二人で決める際には、必ず対等な話し合いと他者の意見の尊重が必要不可欠であることを私たちに再確認させるものである。ピザの注文を例に考えることで、筆者を含む参加者は、不思議と性行為においてはこうしたプロセスが簡単にスキップされてしまうことに気づかされた。

### (3) 性的バウンダリーについて

本題のワークショップでは、最初に「性的バウンダリー」について学んだ。バウンダリーとは「自分と他人との適切な境界線」を意味する。日常生活の中でしばしば私たちは「付き合っている人いるの?」「いい身体だね」「性行為の経験は?」といった質問をされることがある。これに不快を感じる人も多いことだろう。これについて中村氏は「それは性的バウンダリーを侵害されているからだ」と説明した。ただし個々の性的バウンダリーは人によって異なるため、何に対して不快を感じるかは他者からはわからない。だからこそ、私たちは相手の意思を確認する必要があるのである。

このように不快を感じたときに「嫌だ」と伝えること、またいつ、だれと、どのような関係を結ぶかどうかについて、私たちは自分で決めることができるし、そうであるべきなのである。こうした権利を「性的自己決定権」という。私たちはこの権利の存在を知らないか、または忘れがちで、「嫌われたくない」がためについ相手の要求に合わせてしまうことが多いのではないだろうか。

さて、このバウンダリーを守る方法には何があるだろうか? 中村氏が提示した「飲み物をシェア

したいとき」というケースを例に、その時にどういう声かけを相手にするかを参加者で考えた。「飲んでもいい？」と聞く」「ストローを変える」といった回答があった。ここで中村氏が強調したのが、「自分が嫌なことは相手に行わない」では不十分だということである。なぜなら、気づかないうちに相手のバウンダリーを侵害してしまうことがあるからだ。よって「同意をとる」ことが重要になってくる。

#### (4) 性的同意

そこで次のテーマとして「性的同意」の重要性を学んだ。これは中村氏によれば「すべての性的な言動において確認されるべき同意」のことである。そして「同意をとる責任は性的言動を始める側にある」と中村氏は強調した。その際、「うーん」や無言でいることは同意を得たことにはならず、断れないプレッシャーのもとで同意をとろうとしてはいけないことに注意が必要だと中村氏は説明した。「いいえ」と言えない背景には、その人の性（とりわけ女性であること）のみならず、年齢や宗教、人種といった様々な要因が関係していることに留意しなければならない。性的同意の取り方については、イギリスのテムズバレー警察が作成した動画が有名だろう<sup>3)</sup>。ワークショップでは、ビデオを観ながら映像の中に出てくる登場人物のどういった言動が性的同意の観点からみて問題かを話し合った。

#### (5) 性暴力

性的同意をとることが重要なのは、その同意がなければ性暴力を誘発するからである。性暴力はレイプにとどまらない。例えば、痴かんや露出、性的指向を本人の同意なく他人に暴露する、盗撮、避妊を拒否するなど含まれる。またレイプについては、夫婦間においても起こり得ることを見逃してはならない。「夫婦関係にあること」「長年一緒にいるカップルであること」は、性的同意の必要性を免ずる理由にはまったくならないのである。さらに、性暴力、特にレイプは見知らぬ人からされるものとも限らない。中村氏いわく、むしろ被害の約8割は知人によるものなのだ。

こうした性暴力にまつわる「誤解」は広く社会に存在している。例えば「被害者の女性が派手な格好をしていた」「男性は性暴力被害者になるはずがない」という考えはその典型例である。中村氏は、「誰もが性暴力被害者になる可能性があること」「ショックにより被害者はその場で抵抗できないことがある」ということを最後に強調した。

#### (6) 第三者介入

ワークショップの最後に、第三者介入の方法について学んだ。第三者介入とは、被害者でも加害者でもない第三者が、性暴力が起きそうな状況に介入する、あるいは起きてしまった後に介入することを意味する。具体的な方法としては、加害者にやめるようにはたらきかける「直接介入」、なんらかのかたちで加害者や被害者の注意をひくことで性暴力の発生を回避する「気をそらす」という方法、自分よりもうまく介入できる別の人に助けを求める「委任」といった方法である。ただ介

入することは簡単なことではないため、中村氏は「自分の安全を第一に考えること」と注意を促した。また中村氏は、介入の際に「被害者を非難しないこと」も付け加えた。なぜなら「被害者は100%悪くない」からである。暴力の中でもとりわけ性暴力は、その発生を被害者の「自己責任」に帰する言説が今日も絶えない。ゆえに、介入する側は被害を深刻化させるような言動をせずに、被害者が話しやすい環境を作り、場合によってはしかるべき機関に相談するなどすることが求められる。

#### (7) ワークショップを振り返って

性暴力が発生する場合は飲み会の席の場合もあれば、密室である場合もある。その場合、第三者が介入することは難しい。また性的暴力の特徴としては、性についてオープンに語る事がタブー視される社会ほど、デートDVの中でもっとも隠されやすく(他者に相談しにくい)、その結果、被害者が誰かに相談する段階では問題がかなり深刻化している場合が多いと言われている(井ノ崎2016: 87-88)。そのため、性暴力の発生を防ぐためには、上記で紹介したような様々な知識をすべての人が持つことが必要不可欠である。しかし日本の学校現場では、性的な関係を結ぶこと自体を否定的に捉える傾向があり、性暴力を防ぐための性教育も極めて不十分である。したがって、今回のようなワークショップが今後も広く教育現場で実施されることが望まれる。

## 2. 第2回「松岡宗嗣氏による講演」

(開催日時：2022年11月4日、3限。講師：一般社団法人「Fair」代表、松岡宗嗣氏)

公開講座第2回目では、ゲイであることをオープンに活動されている松岡宗嗣氏をお招きして講演をお願いした。講座の前半では、松岡氏がなぜこうした活動を行っているか、その背景についてのお話があった。松岡氏は、幼少期から明るい性格の持ち主であったという。そしてゲイを笑いのにするような風潮があった当時、それに乗るようなかたちで自身のセクシュアリティを「笑い」にし、持ち前の性格を生かしながら日々を生き抜いていたという。そして家族の支えもあり、後に家族をはじめ周囲にカミングアウトをした。ただし、カミングアウトは決して簡単にできるものではなく、松岡氏の話では2019年の時点で、職場でカミングアウトしている人の割合は2割だという。松岡氏はカミングアウトの意味について、それは「自己肯定感を高める行為」だと話した。しかしながら、カミングアウトという行為は、それを尊重して受け止めてくれる人もいれば、疎ましく思う人々もいる。つまり自身のカミングアウトがどのように受け止められるか、そしてセクシュアル・マイノリティが自分らしく生きていけるか否かは周囲の環境次第で決まってしまう。そこで松岡氏は、周囲の人に左右されずに安心して生きていくためには、「法律」が必要だと考えるようになったという。そしてすべての人々が公正に生きられる社会を作るために、「Fair」(公正な)という名称の団体を立ち上げることになった。現在の日本社会には、職場等におけるパワハラやセクハラを罰する法律はあるが、セクシュアル・マイノリティへのハラスメントはなかなか問題にされない。そうした経緯から、LGBTQに対する差別をなくすための禁止法の制定が今日推進されている。

第2回目の講座では参加者は9名で、学生のみならず、全学共通教育の教員や、ユニバーサル・デザインセンターの職員にもご参加いただいた。小人数ということで、松岡氏の提案により、お菓

子やジュースを片手に自由に質問や話をするスタイルで進められた。参加者は、最初は少し緊張した面持ちではあったが、松岡さんの大変気さくな性格に後押しされ、多くの質問が交わされた。例えば、自治体におけるLGBTQ政策、メディアでのLGBTQの表象、さらにはパートナー探しの方法といった様々な質問について松岡さんにお答えいただいた。

講演後に参加者にアンケートを依頼し、「よかった点や理解できたこと、新たに気付いたこと、疑問点」などについて尋ねたところ、以下のような回答があった。

- ・LGBTQの認知が広まりつつあるが、言葉が先行しており当事者の生きづらさや立場といった個人単位での問題は見過ごされてるように感じている。そうした意味でも、今回のイベントを通じて発信している人の過去や考えを聞いたのは、性的マイノリティが直面する問題を考える上でとても参考になった。
- ・自分の質問が相手を傷つけていないかまだ不安ですが、自分の中でずっと疑問というか不安だった点をぶつけられて良かったです。自分が性的マイノリティかもしれないという事を大学生になって気が付きましたが、それは今だけでは無いのか、将来変わることは無いのか、という事が怖くて今現在、自分でも認められてないと思います。でも、変わる可能性もあるということ当事者の方から言われると少しだけでも自分を肯定できた気がしました。ありがとうございました。
- ・今回のような当事者では無いマジョリティ側の人にセクシャルマイノリティについて知ってもらうという経験はとてもいいものだと感じました。なかなか友人などにセクシャルマイノリティが居ないと質問することが出来なかったり、友人だと聞けない事などもあったのでとてもいい機会であったと感じました。

これらの回答から、当事者としてLGBTQの権利保障を求める社会運動の frontline に立つ松岡さんから話を聞くことができたことで、参加者は何らかの気づきを得られたようである。特に一つ目の回答にある「言葉が先行しており当事者の生きづらさや立場といった個人単位での問題は見過ごされてるよに感じている」といった指摘は重要である。「LGBTQ」という言葉を知らない人はもはや少数ともいえる今日の日本社会において、なぜ「LGBTQ」という言葉が生まれたのか、その背景にはどのような当事者の生きづらさがあるのかについてはあまり触れられることはない。「みんな違ってみんないい」という簡単な標語からは見えてこないセクシュアル・マイノリティの日々の生活や、過去から現在まで続けられてきた社会運動の意味を知ることは、セクシュアル・マイノリティを取り巻く問題を、「思いやり」ではなく「人権」の問題として考えるために必要と言えよう。

### 3. おわりに

講座終了後に、何名の学生から「今回参加できなかったので、次回こうした講座があればぜひ教えてほしい」との連絡を受けた。本学ではジェンダー／セクシュアリティを取り扱っている講義はいくつかあるが、今回の講座のように授業では語られない「実践的な知」を求めている学生がいる

ものと想定される。そうした学生たちの声に応えられるよう、今後もこうした講座を積極的に企画していきたい。

## 注

- 1) 「コロナで若年層の望まぬ妊娠、相談増える DVや経済的困窮も」『毎日新聞』2021年9月21日 <https://mainichi.jp/articles/20210922/k00/00m/040/017000c> (2022年12月15日閲覧)
- 2) 2018年発足。女性をはじめとするあらゆる性の人が自分を肯定できる社会に向けて、性的同意を広め性暴力をなくす活動や性別役割分業を考え直す活動など、当事者同士がつながり共に声をあげることで社会的・政策的変化を起こす草の根運動を展開している(ちゃぶ台返し女子アクション HPより。 <https://chabujo.com/>)。
- 3) この動画は日本語でも視聴できる。 <https://www.youtube.com/watch?v=pZwvrXVavnQ> (2022年11月25日閲覧)

## 参考文献

- 井ノ崎敦子「親密な関係における暴力——デートDVについて学ぶ」青野篤子編著『アクティブラーニングで学ぶジェンダー：現代を生きるための12の実践』ミネルヴァ書房, pp. 85-97.
- 厚生労働省「令和3(2021)年版厚生労働白書—新型コロナウイルス感染症と社会保障」
- 認定NPO法人 ReBit (2020)「LGBTQ YOUTH TODAY セクシュアル・マイノリティの若者(12～34歳)への新型コロナウイルス感染拡大の影響に関する緊急アンケート」[https://pridehouse.jp/assets/img/handbook/pdf/lgbt\\_youth\\_today.pdf](https://pridehouse.jp/assets/img/handbook/pdf/lgbt_youth_today.pdf)(2022年12月15日閲覧)